

記録二十四メートル

代田中・1 山瀬 咲希

私は水泳が嫌い

だが 毎年やってくる水泳の授業
そして どんどん近づいてくる

ついに来てしまった

中学校での水泳の授業

小学校とは違う

プールの深さ

立っているだけでも

精一杯

(こんな私が泳げるのか。)

今年の課題は

背泳ぎ二十五メートル完泳

絶対無理だ

ため息をついた

一年ぶりの水泳

クローラーは

去年よりも泳ぐことができなかった

背泳ぎは

浮くことすらできなかった

でも 浮かなければ始まらない

私は始めにビート板を使って練習した

だが 浮けたのも一瞬

私はひとりで

バタバタしながら沈んでいった

もう一度 もう一度

諦めずに頑張った

練習している私を見て

「ビート板がなくてもできるよ。」

先生が声をかけてくれた

その言葉を信じて

ビート板なしで浮いてみた

(えっ、沈まない?)

私は浮くことができた

もう全てやり切った気でいたが

泳げていないことに気づいた

焦りながら練習したが

泳げるようにはならなかった

そのままむかえた背泳ぎの計測の日

前の人の泳ぎを見習う私

順番がきた

「ビーツ。」

笛の合図とともに

足は壁を蹴った

思いつきバタ足をしているのに

空の景色は変わらない

みんなの視線を気にしながら

ゆっくり

少しずつ

進んでいった

(もう、無理だ。)

何度も何度も

諦めようとしたけど

「咲希ならいける。がんばれ。」

クローラーのときよりも

先生の声がよく聞こえる

その応援で

がんばれた

(二十五メートルまで、あと少しかな。)

そう思ったとき

「あと半分。」

先生の言葉に

耳を疑った

(まだなの。まだなの。)

ゴールまでの道のりは長かった

それでも先生は

ずっと応援してくれた

「まだいける。まだいけるよ。」

私はバタ足に力を入れた

「あと五メートル。」

この言葉を聞いたとき

(最後までいける。)

そう思った

残り四メートル

三メートル

二メートル

一メートル

壁に手をのばしたとき

急に視界は水の中へ

思わず立ってしまったのだ

「記録二十四メートル。」
先生が言ったこの言葉に
私は絶望した
私の頑張りには
あと一メートル
届かなかった

（次こそは、絶対に泳ぎ切る。）
そう挑んだ夏休みの水泳の補習授業
最後の最後に
二十五メートルを
泳ぎ切ることができた
初めてのゴール
今までの水泳の授業の中で
いちばん楽しかった